

芭蕉翁
發句解

說叢大全

四



蕉翁發句說叢大全卷第四

葛飾 素丸 著述
全 南臺 檢校

秋部上

祢ふの末れ葉ごし色や人星此氣

袋云七夕の夜夕水も合歡の末れ葉ごし色や人星此氣
ら深き時とてと祢ぬの末れ葉ごし色や人星此氣
解云新後拾遺集七夕の
葉を恨もいふとて一葉のうらよみは侍とてむ合歡の河もふ

素更き夕ア小志月じ眠ふのてくかまは倍語採むの本ともいへ
る夜の整りなれを此景誠しといへとも也 林此句を其言

説採ぬるもいふにしを採ふの本小志月家六文

白りしに採ぬる本もいふにさもいふに二星

のわよ夜に眠らざ依りの少や古説いすべからず

倍語もすう家るも庚申の夜の思いたふ少也 解

引平合歡の言味よ叶しや此亦小限るるうらほ ○

けらう句意と考るふ合歡ヨロヨロと讀むや其のゆへ

よ合ふの形容也兼いふにみやくに茂りてすのゆへ
けら翠簾と八重もつけたるもよその景ごとくも

二

いひてまのせよ一とせよ一夜の整りある程や此方より

幸魚して思ひと述るる句也優美の風流をわけて感ふ

採ふは縁浩は星合への優艶のより合せりといへ ○格物記

曰。夜合一名合歡亦名合昏按圖經安和五藏和心志令人

歡樂云採ある月のこわ色採ぬるをやりけて飲むむ

るの能あまは此が一合の夜の五合せやな是小志月のもの

何れいひなすうか夫木抄 九 採ぬの本 貞應二年百首

庭系為家 何きといひはさかぬあうと採ふの本もあうらぬ

かうにすのめらるる 新撰六帖 かうら 為家 うかりま

かうに花のためうら我思ふてもさぬるありて

人に向せし。作意凡例小なり。是は鮎魚のあやしく
たるなり。こそえゆ。是は白外の餘情ともいふや
後水尾院御製めを釣つたあさかしく小唱うえてさうと
久しき花もそありうる。是憚るも多きことあつ。さう
まむのためと業え久しきあやしく。目出度あそむや
とこそ名譽の事あり。中法下と。和歌の中か俗活
達の場合も。況や俳諧醉のさうり出生せ。俳諧を
いふは。悟ぬ人乃き。さうとさよ

解 云々の禪師の曰吾心もわり余せうと思ふ。茶一粒と百分

と。悟ぬ人乃き。さうとさよ。實は悟ぬ人乃き。三十棒の徒也
實は悟ぬ人の悟まう證まうと思ふ。念夜をほく。一
点か。袋林。此句と出さ候

說解 八句の解あり。悟心法の取捨ともいひ。此句ハ悟道
と。悟りし句あり。梅書の親想あり。悟ぬ人の。さうと
る句也。さうと。悟道の論ハ枝道。蛇足と添るとも云ふ
解あり。か。の。さうと。初葉の年より。さうと。此句ハ解
思ひたり。さうと。叶い。○或書ハ。無名目
此句ハ我見の誠也。石火電光。是猶鈍。少死の火急あり。ゆ
と。大悟。今ハの時を覺悟。さうと。力の。さうと。いふ

無名目
有油

不埒也。解 峯まうら。莊子濠ま然う。○ 去来抄曰此句如何
 去来曰ふあかりうらふ中の七文字んくく發句ハ詩文ハ
 せんの方よりくくせんくく井と云物ハ亦帯の具ありん
 此井買て後ハ鍋もわく桶もほく世の物ハ隠者ハ
 よりわくまを鑑ハハ中ハわく也と云々○ 住吉名勝志云
 摂津國住吉太神宮毎年九月十三日寶具の市とて大津奉
 且社勢社司大祿互誂くは仕て神供之商人外物さく
 ありとさく賣吉兆ありて諸人買て歸ふと云々此句
 寶の市とて此吟也。元禄七年の吟也。

叢 虫 菴

今宵たきより一歩の月を十六里

林 云新古今源三位於彼こよひきりす、吹風を御りけ
 りのつげの月を十六里しけまよふや二千里の外を十六
 里ふまうらう神の嶽のま程をけ歩の歌向や此歌の心ま
 くのつげの月を十六里せん我もうらう心もあ
 一編の節ある歌えと云々の自撰のあまう法中玄音
 の説也發句もそふりくつや深意可尋り也後人の心も

馬上吟

翁の此句一記ありふかき阿久保に今ありし也

みちの道乃りしげの馬よ喰さるり

袋 云此句ハ木槿と新教とありて午時の日よ志存れり馬不
 喰さるりよもの作意歟也此句面よ深意ありしと云ふは芳山
 曉山集よ此句と載て海邊の木槿ハ馬よ喰れりといふ句
 よは非も一向の野早の雜言也と淡きも偏よ芭蕉の上戯弄
 と源く悟らざる也 **林** 云此句つらつらけりよかこのつとめれ
 酒流りしげよあせむ死さくあせむハ馬酔木と云ては酒
 毒ありて馬中ふつとけりもかをつげよも槿も存るるこみ吟

こいなるも喰さるりといふことと人おもわれりよもく
 也只此風杭のちるるも此の風一あかへ **解** 此句と云ふは

説 **袋** 是が邪妄不可信用也木槿と新教とありては六
 部を牽牛子ハ一時の象え木槿ハ一日の象えと古人も中れ
 一しゆぬぬりのしすしてやるし本との差別もあらざるや
 又日小洞をいふるん象えしと云ふ例の無理無体の邪智也
 かくあれはむとて何のぬらやあらんや此注をいふも手紙
 ある無理やいふん又曉山集を引くと云ふ渠がこもき邪
 人の説也と云ふもふまへに古地を山吹と云くといふよ
 といふやの不堪者といふもさうらの人けいせり此句を聞

名月や池とめづりては水もすずしく

林云夏の面よ照月多しとて入定家いれ秋夜も色さぬ十の
ふい出もさうり山谷秋水清く底かゝりと水澄りて清光
らるるなきもえとてさうり句ハ眼前也山更く清りよりさるる
自と何と園の隙とてひひりの思ひくさるるも老とむるか
く我の心むり清りたるやと夜色さうり述懐の心あり下略
此の句はさうりくと云下して芭蕉庵一夜は佳句なりと一宵は
ハ竹のさしむるやたはしやうり下りまゝ句とありと詩と吟
とや光も天よかりを池も氷と志まるとさうり孟とありと客と

解云

らんやうと傳て曉ハ士掌小光とわく光物の榮枯も親とるるか
月のれよきのさうり清り秋夜の色と光もさうり句外の意味さうり
草月の辨りてを孟より下りる

袋 此句と出さる

説林の源文章とわづらんして却て雑々紛々句の餘情なき
らかきとて撰羅會糊也さうり人文学小し不才とて餘多の
人く小光とてさうり清り秋夜の色と光もさうり句外の意味さうり
一は翁の心骨よありとて独病居るさうり句のさうり清り秋夜の色と
隠者とさうり清り秋夜の色と光もさうり句外の意味さうり
妄見也解佳句の風情景色文章にそんやさうり清り秋夜の色と
灰の風流雲と紙とて表と筆さうり清り秋夜の色と光もさうり句外の意味さうり

此の巻も、そのまゝのこゝれ解りて、一句の意うけかゝく、
 初巻おとさうし見ゆる事遠うさへ。先輩の我がふ紛りし、
 増て初巻の人能たかひ、いづれに都て上古より、詩歌の注抄
 どもとらへん。文をば、まやふ質朴小正しく記さへ、要とらへん。
 海ふらして古抄にハ、人の耳ふ落て、その中よりふ発明する
 後哲を多くしし也。終夜の潮ふかきて、秋一よりさ寐もや。池
 とめぐり、岫士峯小とささるるを、あといふ。あやゆらん。
 ○ 又詩歌連俳、いづれの月、いづきのむの惜まざりしや。又詩歌
 と引いて、いづれに生涯尋らうとも、そとらへん。此句小寄、いづ
 れもまゝ、いづれに、いづれのこは、いづれに、景色と文章

小つら、いづれに、媚ふゆき、却てあざや、なほ。又終夜と
 玄初より、曉まで、池とめぐり、月と泳めあせ、いづれに、いづれに
 ず、いづれに、月と惜む、終夜あづし、人とも、刹那の際も、いづれに
 ハ、狂氣人な、いづれに、いづれに、いづれに、いづれに

海むら、いづれに、いづれに、首の青 宗因

名月や、いづれに、いづれに、いづれに、湖春

是人情の、海に風雅、いづれに、いづれに、天然の、いづれに

○ 但徠譯文笠蹄曰終夜ヨモスカラ 通宵ヨ 宵ヨリ曉迄ニ至ルヲハ歴
 史醫書ナトニハ誠ニ夜通シノ心也文章詩歌ノ上ニテ、切ニ
 思ヒツヨク夜ヲ更ス事ヲ見センタメニヨモスカラト云也、と云

綴スミ云云是倭漢人情の風流目。此より有りて西行の言も兼好
 のつまのの四季は辰も亦西行の詞を汲とり也。解は右のく
 のまひー物とありは月と人とも休ませたる言と古今獨歩の
 勅書と移と書きあけけりし。此の世説乃古事。引出あも及む
 ぬよふはまをてかのごとくにせんそをば。いふ程もあひの。今言
 屋をいとも翁の風骨ありとざる媚人の志とぞと知。今を
 句解は、つまもかほ無益のつと多く記し出と准して了解
 づる金。予此故事と出して無益の解のちりんとすをみゆり
 富士川のわたりと似おこのはりもなる。控子はと衣けふ
 解は使より菓子なけて通るやと云。い
 注有り使より菓子なけて通るやと云。い

猿ときて人
 とすく人すて子小秋の風い

林 云猿ときてより有りて海と河をとりて又西行の言なりといふ。芭蕉の
 意と引物と。無益の言も累々。解云芭蕉三叫曉霜行人之裳。こゝに

てよきなり乃ふまけとゆうそこのおひはさるるまをのことかく。か二首引
 畧す。か海詩言のゆとたよりて控子の秋風ふくと喚の猿と断腸い
 つまらぬらしむる也。此句と或集に猿ときてより有り句意分明なりん
 嵐宮神日記と云く泥白らん。猿とす人と記せり。

説林 深いか。引物一首の也。此句よ無益ありのこ。ありは
 いろしの詞とあきりすめして引物と云ふ也。又集にも富士川ふ

用ふし不堪なるものなり。解川前二首益益此友首初
 ても此句意はすゆき也。作しゆきも也。あふもさうく。藤の句々
 ぬふ古言と云はれり。あふゆき。是らに途中の感偶即真なり。
 詩歌もいさう念なきことなり也。たゞ太平記并平家物語
 等と評判也。或代其ゆふ己居合きてのまならんか。百
 年の後春清乃御代も遊びて。乱中の人事を雜りて。毎
 益より片腹偏し。さういふも爪もて蚤と殺し。繭もて蠅と
 ろうりもたやすし。志うも成煙り。ぬきも多かり。これ
 ぐ東西夜活の文脈と。前章小川出せり。もか。附會の古言
 とさうと。解きたり也。○五文字四品之説。猿と交て人。
 句選と記
 不如此

猿ときて。俗林よ池 西り此 猿とすて猿とす人。本朝文鑑并 句解如此記 叔猿と交て人とい
 百風の洞。初念いれも出さず。つら。活の少す早ふたて。
 後よ再素ゆりて。五せりとるえり。猿ときてとい解ふ。一如く
 句意つら。す。猿とすても。百風の洞。猿とす人とい。す。か。わ。り。て。
 句。句意も。す。え。や。し。吏。登。り。神。日。記。の。是。え。可。無。也。吏登一とせ 嵐雪と改
その此のええと云ふは。嵐を神日也。い。也。 考ふ。猿ときて。全。誤。也。猿と
 き。て。せ。ら。ら。る。下。の。さ。の。ま。と。康。忍。人。傳。寫。よ。り。や。ま。う。る。一。て。
 猿ときてと。傳。や。る。え。り。古。本。ず。り。傳。寫。の。誤。は。ん。り。も。か。く。
 是。非。も。な。く。偽。後。出。小。説。と。款。下。一。解。言。い。つ。也。正。と。解。さ
 り。の。な。い。な。り。の。こ。う。か。う。て。年。月。記。を。あ。ら。わ。ん。た。と。い。ひ。す。じ

きつりつりも。止りなく。是非多く。しりしりして。疑ひと。閑事。漢小
之此類多し。詩言はなを。しりの。を。塔て。俳諧な。と。や。た。と。古
風。も。し。り。も。も。定。め。が。ら。い。も。難。し。然。る。に。持。て。重。金。も。も。不
可也。此句も。前ふ。ふ。ふ。と。く。ま。ひ。て。い。ろ。よ。な。く。は。の。句。也。只。句。意。と
の。と。さ。し。り。ぬ。び。智。な。り。い。き。も。や。○巴。峽。の。曉。猿。ハ。他。國。な。り。い。り
聞。こ。叶。し。と。日。本。の。山。家。近。く。ハ。王。子。遠。九。月。の。す。清。比。ハ。を。む。ら
て。い。く。事。極。り。て。身。が。悲。し。く。表。さ。る。物。と。も。や。猿。と。す。て。い。悲
し。人。此。猿。を。流。流。と。あ。ら。し。ま。さ。ん。や。是。は。ハ。悲。し。か。ら。け。不。可。得
ら。親。ハ。い。ろ。ふ。と。や。悪。し。と。い。ハ。猿。ま。い。儀。も。し。き。世。に。親。志。母
量。少。し。て。句。中。ハ。扇。無。り。猿。乃。と。あ。ら。し。む。と。と。流。る。事

の入が。海。も。も。名人。の。事。也。が。原。不。感。仰。と。も。き。事。也。猿。と。は
う。く。評。せん。ハ。猿。の。句。小。落。座。し。是。ハ。捨。子。乃。句。を。猿。う。け。金
物。と。い。ふ。也。

右十有六章

